居ごこちのよい住まいについて考えるための10冊

住む人と建物が一体となって初めて
醸成される「住まい」という空間。
住まいそのものが提供してくれる居ごこちのよさ、
ここちのよい住まいかたをするための工夫、
人と空間をめぐる古典的読み物と最新の動向……。
住まいと暮らしをテーマに、
書籍10冊を選びました。

Number 10

『小さな家』

近代建築の巨匠が、両親のためにスイス・レマン湖畔に建てた家を、詩的なテキストと、写真、デッサン画でミニマムに説き明かす。わずか60㎡の家に詰め込まれたアイデアやプランは時代を超えた普遍的魅力にあふれ、究極の「住み心地のよさ」を求めた家がいかにしてつくられたのかを目の当たりにする。

ル・コルビュジエ著
集文社／1980年

Number 9

『間取りの手帖』

自称「間取り収集家」の著者が集めた、おかしくも不思議な間取り図99点、間取り好きな著名人との対談、エッセイで構成。「間取り好き」というジャンルに光を当て、「間取り図ブーム」の先駆けとなった。そもそも日本人は、なぜ間取り図だけで住宅物件を楽しみ判断することができるのか、と考えさせる一冊でもある。

佐藤 和歌子著
リトル・モア／2003年

Number 8

『空き家問題
1000万戸の衝撃』

住み手のない家が全国で増えている。2020年の空き家率は15%に上り、消滅の可能性がある自治体も多い。背景にあるのは人口増加を前提に都市開発し、経済を活性化してきた日本社会の姿だ。長年不動産市場を見てきた著者は、具体的な対策とともに価値観の転換を訴える。「空き家」を通し日本社会の構造を問う一冊。

牧野 知弘著
祥伝社新書／2014年

Number 7

『家族の絆をつくる家
失敗しない住まいづくりのための30講』

不登校、青少年犯罪、引きこもり、離婚に少子化。家族関係の不調和に端を発する社会問題の数々は、なべて生活空間の病理にその原因を見出すことができる。つまり、生活空間が変われば、家族関係も変わるのだ。「テリトリー形成能力」と子どもの発達の研究者による本書は、優れた教育書としてもおすすめだ。

外山 知徳著
平凡社／2007年

Number 6

『大人が作る秘密基地
屋外、ツリーハウス、リノベーション、シェアオフィスまで』

「自分が満足する空間＝秘密基地」を切り口に、家・空間・コミュニティの自由な作り方を紹介する。セルフビルドのビルやツリーハウス、アートを通して仲間と集まるスペース、DIYできるレンタル倉庫など、取り上げられる秘密基地はさまざま。自分ならどんな秘密基地をつくるのか、想像してみるのも楽しい。

影山 裕樹著
DU BOOKS／2014年

Number 5

『大江戸
生活体験事情』

江戸文化の碩学ふたりが、「火打ち石で火をつける」など、江戸時代までの日本人には当たり前だった生活手段を体験。手間がかかり不便な昔の道具に人間本来の創造性を発揮させる楽しみを見出す一方、こういう生活を一生送らねば、祭りの興奮も春が来る嬉しさも、本当にはわからないはずだという冷静な結びが印象的。

石川 英輔、田中 優子著
講談社／1999年

Number 4

『私のすまいろん
立松久昌が編んだ
21のすまいの物語』

「思想という意地を持つ居住者の住まいに関する論（＝すまいろん）」を連載した雑誌の名物企画から再編成。21人の各界著名人が、住まいへのこだわりや、思い出、遍歴などを、深く、細やかに語る。イレモノではなく、そこにどんなヒトが住むのかが、住まいのありかたを決めるのだと痛感させられる。

（財）住宅総合研究財団
機関誌『すまいろん』編集委員会編
建築資料研究社／2004年

Number 3

『日本人とすまい
住み心地は
どうですか?』

「身の丈にあっているか」「まわりと馴染んでいるか」「自然を活かしているか」「ひとつ屋根の下の感じがするか」「拠り所となる中心があるか」「あいまいで融通がきくか」「心が落ち着く要素があるか」。住み心地をめぐるこれら7つのキーワードを軸に、8人の識者によるエッセイと多数の写真で構成。

柏木 博、大竹 誠監修
リビングデザインセンターOZONE企画
建築資料研究社／2005年

Number 2

『ちいさいおうち』

田舎の丘の上で幸せに暮らしていた「ちいさいおうち」が、ある日、開発の波に呑み込まれる。人、車、工場、ビルの群れが町を豹変させていくさまは、明るい絵柄だけに無残さが際立つ。家とは人の分身であり、歴史の語り部でもあることを実感する一冊。石井桃子の名訳で読み継がれるアメリカ絵本の古典。

バージニア・リー・バートン著
岩波書店／1954年

Number 1

『増補改訂版
地域社会圏主義』

少子高齢化が進み家族が縮小するいま、持ち家をやめ、コミュニティをひとつの単位に共有を増やす——著者が提唱する「地域社会圏主義」の根底には、住宅は経済発展の道具ではなく、住む人の生活が最優先されるという信念がある。エネルギー、地域経済、介護など日本社会が抱える課題へのヒントがつまった一冊。

山本 理顕ほか著
LIXIL出版／2013年